教職支援室便り（３月号）

令和４年　３月　１１日　（金）
文責：教職支援室　曽我文敏
☎０９８５－２０－４８０８

卒業される皆さんへ

３月になりました。卒業される学生の皆さんは、卒業の日を待つばかりです。また、教職に就く方にとっては、赴任する学校を知らせる通知を待つばかりです。今の心境は、教職への希望と不安が錯綜して複雑でしょう。確かに、教員の業務には厳しいものがあります。学習指導や生徒指導、学校行事や地域での活動など、多くの業務の中で大変な仕事だと感じることがあります。しかし、教職をやりがいのある仕事だと実感することも多くあります。

宮崎公立大学の卒業生としての誇りをもち、これからの人生を素晴らしいものにしてください。私も、心から、熱く、いつまでもエールを送り続けたいと思います。

ここで、教職課程履修者の皆さんへの、卒業生からのエールを紹介します。

平成３１年３月卒業
鹿児島県出水市立高尾野中学校　門前　愛貴さん

宮崎公立大学のみなさん、こんにちは。私は小学生の時から教師になりたいという強い気持ちがあり、大学では自分の目標を達成することができるように、教職課程を履修しました。教職勉強会では、曽我先生をはじめ多くの先生方に大変お世話になり、そこで多くのことを学習することができました。そして、採用試験にもなんとか合格することができました。

自分の長年の夢を達成することができた私でしたが、学校現場に出ると、教師という職業は、自分の想像以上に大変だということに気付きました。私は１年目から１年生の担任をさせて頂いたのですが、最初は分からないことばかりで、子供たちに度々迷惑をかけてしまいました。更に、学校現場は予想以上に忙しく、毎日家に帰る頃にはヘトヘトでした。しかし、教師を辞めたいと思ったことは、一度もありませんでした。それは、子供たちと過ごす時間がとても楽しいからです。昼休みに一緒に遊んだり、行事では一緒になって盛り上がったりすることができ、日々とても楽しい時間を過ごすことができています。また、自分の誕生日の時には、サプライズでクラス全員にお祝いをしてもらい、一生の思い出になりました。自分は、今後もそのような子供たちと色々な経験をしながら、成長していきたいと思っています。

教師という職業は、大変ですが非常にやりがいがあります。かわいい子供たちがみなさんを待っています。採用試験の勉強はきつい時もあると思いますが、自分を信じて頑張ってください。

３８８の面接試問例の分析（整理）：その１

各自治体では、教員採用選考試験の倍率低下の影響や、学校教育を取り巻く様々な問題も相まって、優れた人材の確保が最優先課題となっています。そのため、教員採用選考試験においては、特に人物を直接評価する「面接試験」に、重点を置く傾向が強くなっています。

このことを踏まえ、今回これまで教職特別講座（旧：勉強会）で活用した、３８８の面接試問例を、１６の視点を設定し分析（整理）しました。この資料は、今後教職特別講座で有効に活用していきます。

なお、この関係資料を数回にわたり、教職支援室便りに掲載したいと思います。

＜面接試問例１６の視点＞

1 受験自治体に関すること
2 生徒指導に関すること
3 保護者対応に関すること
4 これまでの経験に関すること
5 教員としての資質･能力に関すること
6 人柄・性格等に関すること
7 コミュニケーション力に関すること
8 学習指導力･授業力に関すること
9 学級経営に関すること
10 徳育に関すること
11 大学生活･教育実習に関すること
12 教職等に関すること
13 学校教育全般に関すること
14 服務規律に関すること
15 コロナウィルス対策に関すること
16 その他に関すること

公立学校教員採用選考試験の実施状況

文部科学省は、令和４年１月３１日に「令和３年度（令和２年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施状況」について公表しました。

＜調査結果の概要・全体＞

【小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・養護教諭・栄養教諭】
○　全体の競争率（採用倍率）は、３．８倍で、前年度の４．０倍から減少
○　採用者総数は、３５，０６７人で、前年度に比較して１９２人増加
○　受験者総数は、１３４，２６７人で、前年度に比較して３，７７５人減少

＜調査結果の概要・試験区分別＞

【小学校】
○　競争率（採用倍率）は、２.６倍で、前年度の２.７倍から減少
○　採用者数は、１６，４４０人で、前年度に比較して１６５人減少
○　受験者数は、４３，４４８人で、前年度に比較して１，２６２人減少
【中学校】
○　競争率（採用倍率）は、４.４倍で、前年度の５.１倍から減少
○　採用者数は、１０，０４９人で、前年度に比較して９９２人増加
○　受験者数は、４４，１０５人で、前年度に比較して１，６５８人減少
【高等学校】
○　競争率（採用倍率）は、６.６倍で、前年度の６.１倍から増加
○　採用者数は、３，９５６人で、前年度に比較して４５３人減少
○　受験者数は、２６，１６３人で、前年度に比較して７３２人減少

＜競争率（採用倍率）＞

【小学校】
○　競争率が高い自治体
　神戸市７．３倍　高知県６．９倍　奈良県５．１倍
○　競争率が低い自治体
　佐賀県１．４倍　福岡県、長崎県、富山県１．５倍　大分県、山形県１．６倍
【中学校】
○　競争率が高い自治体
　沖縄県１３．７倍　高知県９．５倍　川崎市８．２倍
○　競争率が低い自治体
　新潟県２．３倍　茨城県２．６倍　佐賀県２．７倍
【高等学校】
○　競争率が高い自治体
　沖縄県１８．４倍　三重県１３．８倍　秋田県１２．２倍
○　競争率が低い自治体
　川崎市２．３倍　横浜市２．５倍　茨城県４．０倍

◇◇

○　小学校において、採用倍率が過去最高の１２．５倍であった平成１２年度においては、採用者数が３，６８３人であるのに対し、令和３年度においては、採用者数が、１６，４４０人と５倍近くに増えた結果として、採用倍率が２．６倍まで低下している。
○　中学校や高等学校については、全体として４．４倍、６．６倍の採用倍率を保っているものの、既卒者の受験者数の減少に加え、直近５年間では新規学卒者の受験者数の減少が見られている。

道徳の教科化に思う！（シリーズ５８）

平成２９年の６月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。今回は、「教材・ネパールのビール・指導資料その１」として、教材の見方・考え方についてまとめました。

なお、次回は、本教材に関する発問構成等について掲載します。

１　教材名「ネパールのビール」

２　出典「教科用図書」
学研教育みらい、廣済堂あかつき、日本教科書

３　対象学年
中学校１・２年生

４　ねらい　内容項目Ｄ－（２２）「よりよく生きる喜び」
人には自己中心的、打算的な価値観で行動する弱さがあることにふれながら、他者の喜びのために懸命に生きようとする強さもあることを感得させ、人間尊重の精神をもち、よりよく生きていこうとする心情を養う。

５　教材内容（概略）
筆者が、撮影のためネパールのドカラ村に滞在したときの話である。この村は、自動車が通れる道路を含む、一切のライフラインに恵まれていない地域にある。ある日筆者は、村の少年チェトリ君に４本のビールの購入を依頼する。販売所は、大人の脚でも１時間半はかかるところにあったが、チェトリ君のおかげで、筆者やスタッフはビールを飲むことができる。そして、次の日、今度は１ダース以上のビールを依頼し、大金を渡して送り出す。しかし、チェトリ君は、あくる日も、その翌日も帰ってこない。村人たちに聞くと、大金をもって逃げたと言われる。筆者は、歯ぎしりするほど後悔するが、３日目の深夜、泥まみれになってチェトリ君は帰ってくる。手には、転んで割った３本のビールの破片と釣銭を大切にもっていた。筆者は大泣きをする。

６　教材の見方・考え方
指導に際しては、まずドラカ村の人々を取り巻く生活環境をおさえる必要がある。現代のライフラインはいっさい入っていないこと、自動車などが通る道がないこと、人々は自分たちの生活が世界の水準より下であると熟知していること、かなり辛い思いで暮らしていること、若者たちや子どもたちは電気や自動車のある町へ行きたいという願望が強いことなどは、村人が、チェトリ君が帰ってこない理由を、「逃げた」と考えることにつながるからである。また、このような環境の中で生活し、経済的にも苦しいであろうチェトリ君が、誠実にビールを買って帰ってきた行為の素晴らしさも浮き彫りになる。

次に、主人公が自分のわがままな気持ちから、ビールを依頼したことをおさえたい。ビールは余分なものであり、スタッフ全員で協議した末に諦めたものである。それを自分の欲のためにチェトリ君にお願いした経緯も、大切なポイントとなる。主人公が軽率にお願いしたにも関わらず、チェトリ君は泥まみれになりながら、３日をかけて懸命にビールを買ってきてくれたのである。主人公は、その心の純真さ・気高さ（人間としての強さ）を実感したことで大泣きをする。チェトリ君が帰ってきた場面の、主人公の心情を深く話し合わせるためには、このポイントをおさえておくことが重要である。

事前指導としては、教材が長文であり一読では内容理解の困難な生徒がいることや、ドカラ村の人々を取り巻く生活環境等を理解して授業に臨むようにするため、教材を読む活動を設定する。授業では、導入時にドカラ村の生活環境等にふれるようにする。

展開前段においては、チェトリ君にビールを依頼する場面、チェトリ君が大金をもった

まま帰ってこない場面、チェトリ君が３日目の深夜帰ってきた場面を取り上げる。まずチェトリ君にビールを依頼する場面では、主人公が１回目の依頼で調子にのり、さらに大金を渡してビールを依頼する気持ちを話し合う。生徒からは、「ビールが飲みたいから」という反応が予想されるが、補助発問「こんなに自然条件が厳しい中で、２度も依頼する主人公をどう思いますか。」を投げかけ、主人公の言動を評価させる中で、生徒が主人公の存在を身近に感じ、自分との関わりで考えられるようにする。そして、補助発問「チェトリ君は、どんな少年なのでしょう。」と問い、チェトリ君の勤勉さや純真な心などについて触れた上で、チェトリ君が帰ってこない場面へと導く。

チェトリ君が帰ってこない場面では、村人や先生から、「大金を持ったのだから、逃げたのだろう。」と言われたときの気持ちを十分考えさせたい。事故を心配する一方で、あんないい子の一生を狂わしたと考え、経済的に苦しいであろうチェトリ君を、懐疑的に見る面について話し合わせる。その際、補助発問「チェトリ君が逃げたと考える主人公を、ひどいと思いませんか。どうして、信じてあげられないのですか。」などを投げかけ、生徒の心を揺さぶりながら、主人公の人間としての弱さに深く共感させるようにする。

最後に、チェトリ君が３日目の深夜帰ってきた場面では、チェトリ君の様子「泥まみれでよれよれの格好」、「山を四つも越した別の峠まで行った」、「べそをかきながらその破片を全部出してみせ、釣銭を出した」の表現を添えながら、その姿を目の当たりにした主人公の気持ちを、教師と生徒が一体となって話し合いたい。ここでは、単にチェトリ君が事故に遭わずに帰ってきたことを喜んでいるのではなく、わがままなお願いをしたうえに、大金を持ち逃げしたと疑うなど、自分の情けなさや愚かさを感じながら、チェトリ君の誠実さ・実直さ・素朴さなどの純真な心（人間としての強さ）を体感していることを捉えさせる。そのあと、補助発問「『あんなに深く、いろいろ反省したこともない』という主人公は、チェトリ君からどんなことを学び、これから生かしていこうと考えたのでしょう。」を投げかけ、ねらいとする価値を把握させたい。